

## 蛇生瀬の淵

じょうせ

昔、芹川の蛇生瀬の淵の近くに、働き者の百姓夫婦が住んでいました。

暮しも豊かで、これといった不足はありませんでしたが、ただ一つ、子どもがいないのが悩みでした。

そこで夫婦は、日ごろ信心している蛇生瀬の淵の龍神に願をかけることにしました。

二日間淵に酒を注ぎ祈り続けたかいあってか、夫婦は可愛い女の子を授かりました。

喜んだ夫婦は娘を大事に育て、やがて一五年の年月がたちました。

ある時、夫婦は龍神に願いをかけた当時を思い出し、ちょうど満願に当たった夜、

美しく成長した娘をつれてお礼参りに出かけることにしました。一五年前と同じく月の明るい夜でした。

夫婦は娘に「さあ、まずお前からお礼を」とうながし、酒を満たしたヒョウタンを持たせました。

娘がヒョウタンの酒を淵に注いだその時、娘は着物のすそをひるがえし

あっと驚く夫婦の目の前で淵に飛び込んでしまいました。

夫婦はただおろおろするだけで、どうすることもできません。

そして、にわかには黒雲が出て月はかげり、淵に白波が立ち始めました。

やがて淵の水面に娘が姿をあらわし、夫婦に向かってこう言いました。

「どうか悲しまないで下さい。私は龍神の子です。定められた日が来たため、

元の姿に戻らなければなりません。

別れはつらいのですが、

本当に一五年の間ありがとうございました。」

そう言い終わるや否や、みるみる娘の下半身から蛇身にかわり淵に沈んでいきました。

以来、夫婦は毎年その夜を娘の命日と決め、淵に酒を注ぎ続けたということです。